



ペトレンコの《ムツェンスク郡のマクベス夫人》は、オペラの本来あるべき姿を実現したプロダクションだった ©Wilfried Hösl

る、今シーズン初の新演出オペラ、ショスタコーヴィチ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》は、期待を上回る満足感を与えてあまりある出来であった。

所見日の12月4日は、ライブ映像がインターネットの「STAATSOPER.TV」で放映されたが、この凄さを実感するにはアップ映像が邪魔をするかもしれない。オペラの本来あるべき姿を実現したプロダクションだと言えるであろう。

まず巨匠ハリー・クプファーの演出とハンス・シャフェルノッホの舞台美術、ユルゲン・ホフマンの照明が相乗効果を生み出した視覚的迫力は、大劇場でのみ享受できるであろう。

題名役のアーニャ・カンベをはじめ、セルゲイ役のミーシャ・ディディクラの細かい色合いを内包した歌唱も、テレビ向けのこちんまりした声で表現したのではなく、大劇場で通用するヴォリュームを携えているという驚きに感動できるのは、生で聴くからこそなことだ。そして何よりも、ペトレンコが自在に操るバイエルン州立歌劇場管弦楽団が、登場人物の性格や、その時の彼らの感情を雄弁に描き切っているため、カメラワークでアップにされた映像があると、ズームアップされた情報に邪魔されて、あれほどまでに語りかけては来ないだろう。

それほどまでに完璧な「オペラ上演」で、作曲したショスタコーヴィチ自身が指揮しているような錯覚すら与えるペトレンコに、観客達は惜しまぬ拍手とブラヴォーを浴びせた。(中 東生)

Opera

バイエルン州立歌劇場《ムツェンスク郡のマクベス夫人》

音楽総監督キリル・ペトレンコが振